

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査)

梶 茂樹



学位申請者 神谷俊郎

論文名 バツァ語の記述研究 —その音声、音韻、文法—

神谷俊郎氏のこの論文は、南アフリカ共和国南部の、主として東ケープ州東北部に話されるバツァ語 (isiBhaca) について、自らが現地で行ったフィールドワークによる成果を記述研究としてまとめ、提示するものである。

バツァ語は、バンツール系の中のングニ系の言語の1つである。南アフリカに居住するングニ系民族は、コサ、ズールー、スワティ、ンデベレが主要構成民族として知られているが、これら以外にも、少数民族が幾つか存在する。しかし、人口規模や居住域が小さく、南アフリカ国内においても、あまり広くは知られていない。バツァ族も、このような少数民族の1つである。人口は現在 20 万人程いると推定されるが、居住域が、コサとズールーという大文化圏の狭間に位置しているため、その多くは日常的にコサ語あるいはズールー語を話し、現在、バツァ語を自由に話せる人はほとんどいない。神谷氏は、現地インフォーマントワークにより、このバツァ語を中心にすえつつも、コサ語およびズールー語、そしてングニ系諸言語全体を視野に入れながら、地道に調査を続けてきた。

南アフリカでは、アパルトヘイト政策による民族的枠組みの人為的操作と土着文化の破壊により、バツァ族のような少数民族の存在は、過去半世紀にわたり無視されてきた。このためバツァ語は、これまで、研究対象として顧みられることはほとんどなかったものである。本研究は、このような大言語に取り込まれ、消滅しつつある少数言語に関する詳細な記述研究であり、その音声学的研究の貢献と共に、ングニ諸語、ひいてはバンツール諸語全体の研究と分類に関しても、新たな視点をもたらすものとして高く評価された。

本論文は、以下の全6章 (294 ページ) よりなる。

- 第1章 バツァ族・バツァ語について
- 第2章 子音と母音、および幾つかの音声的、音韻論的な現象
- 第3章 品詞と文法概要
- 第4章 バツァ語音調の基本事項
- 第5章 名詞音調
- 第6章 動詞音調

第1章では、南アフリカにおける言語状況が説明される。系統からは、大きく、英語、アフリカーンス語の印欧系とバンツール系とに分かれるが、バンツール系はさらに、ングニ系とソト系、そしてツォンガ語とヴェンダ語の4グループに分かれる。そしてングニ系

には、コサ語、ズールー語、スワティ語、ンデベレ語とバツァ語が含まれる。

バツァ語は、一般的には、東北に500キロあまり離れたところに話されているスワティ語の一方言とされてきた。それは特に音声・音韻面において、隣接のコサ語とズールー語が有声(息漏)歯茎摩擦音[z]で表すところをバツァ語では、スワティ語同様、ほとんどの場合、歯茎放出音[tʰ]で表すためである。しかし神谷氏は、これは自身が集めた口承伝承および、詳細な音声学的調査により、バツァ族は本来ズールー族の一部であるが、シャカ王の追っ手から逃れるため、あえてスワティ語風の発音を取り入れたためではないかと推定する。実際、確かにバツァ語はスワティ語と共通した特徴をいくつか持つが、ングニ諸語全体で見たとき、それよりもコサ語、ズールー語に共通する特徴の方が多いのである。

第2章では、バツァ語の音声・音韻的特徴について述べる(声調は第4章以降)。バツァ語の母音は、他のングニ諸語同様、/i, e, a, o, u/の5つであるが、子音は数が多い。神谷氏は詳細な音声リストを提示し、それによると、非クリック音が52、そしてクリック音が15の計67ある。ただし音素としては、非クリック音が34、そしてクリック音が15の計49子音である(外来語やイデオフォンのみに現れるものは除く)。ここでングニ系諸語に特徴的なクリック音(クリック音はコイサン諸語から取り入れられたと考えられている)について、調音点の違いにより歯c [ʄ]、歯茎q [ʑ]、側面x [x]の3つのクリック型、そして随伴音としては無声無気、無声有気、息漏、鼻音、鼻音息漏の5種類あることが示される。

また、この章では、あとに続く声調のピッチを押し下げる作用を持つデプレッサー子音の音声的詳細についても述べられる。なおデプレッサー性は子音のみの現れるものではなく、母音にも現れる。特に名詞述語文がこれによって形成されることは注目に値する(umntu「人」対 umntu「人だ」参照)。また入破音/b/ [β]は音声的には有声音でありながら、デプレッサー性を示さない、口蓋化により無声無気(放出音) [tʰ]になるなど、音韻的には無声音の特徴を持っているという指摘は重要である。この章では、その他、音韻論プロセスによる様々な音変化や音声の配列制限についても述べられる。

第3章では、バツァ語の文法の概要について述べる。まず品詞の種類が述べられ、名詞についてはその形態論的構造、クラス分類、接辞類による派生、名詞述語文での用法などが詳述される。また、名詞のクラスによる形容詞、指示詞、動詞の活用形などの呼応(文法的一致)についても述べられる。動詞については、その構造と用法について、主として活用形の時制、相、法の活用について記述する。さらに助動詞、独立代名詞、指示詞、数量詞、形容詞、関係詞構文、所有辞と所有代名詞、疑問詞などについて、その形態と用法が示される。

第4章以降は、音調現象についてである。まず第4章では、後続する第5章「名詞音調」、第6章「動詞音調」への導入として、バツァ語の音調の基本的な事項について述べる。バツァ語の音調は、基本的には高声調 H(igh)と低声調 L(ow)であるが、数は少ないが、下降調 ɿL もある。ただし、これは通常、長母音化する次末音節の位置にしか現れない。実際の声調は、以上に加えて、a) デプレッサーに伴う様々な音変化、b) ダウンドリフト、c) ダウンステップ、d) H声調の影響によるL音節のピッチの上下などが加わって実現される。その中でも、デプレッサー・シフトなど、デプレッサーに伴う様々な音変化がバツァ語においては特徴的であり、詳細に説明される。

第5章は、名詞の音調についての分析である。名詞の形態論的構造は、冒頭母音-接頭辞-語幹であるが、このうち冒頭母音は名詞が他動詞の否定形の目的語となった場合現れないなど、統語的な制約を受ける。名詞は基底音調的には、冒頭母音は常にH、接頭辞はL、そして語幹はH、L、ɿLのいずれかである。単語全体のパターンとしては、語幹に注目し、その音節のいずれかにH(ɿLにおけるHを含む)をもつ高声調型と、

音節がすべてLの低声調型に分類され、さらに高声調型語幹は、語幹の音節数に応じていくつかの音調型に分類される。そして語幹音節数ごとに音調の表れについて詳細に分析を行う。ただし現時点では高声調型に関しては、パターンの規則性は見いだし得ないとしている。

第6章は、動詞音調についての考察である。動詞変化形には、不定詞形、直説法形、接続法形、分詞法形、関係法形、命令法形など数多いが、これらの声調の現われを1つ1つ分析、確認していく。まずバツァ語の動詞語根は、高型と低型に分かれることが示される。実際の変化形では、基底のHが、もとの位置を離れて、右へ移動する移動音調パターンと、そうでない固定音調パターンとがある。移動音調パターンは、不定詞形や直説法現在時制形など基本的な活用形に多く見られるのに対して、固定音調パターンは、各活用形の否定形や、時間的に遠い時制、直説法以外の分詞法形や接続法形など、特定の活用形に特徴的なものとして現れる。動詞活用形の網羅的な記述と分析から、動詞音調は固定音調パターンには基本的な4種類があること、また、Hをもつ形態素が二つ並ぶ場合に、前方のHが消失するH消去規則が、さまざまなバリエーションで機能することが明らかにされる。

本論文は、南アフリカバンツール・ングニ系バツァ語に関する記述研究と題されているが、社会言語学的考察をも含む総合的研究である。アパルトヘイト時代には、コサ族地域に住むものはコサ族、ズールー族地域に住むものはズールー族という風に、民族は自動的に決まっていたのであり、そこにバツァ族などの少数民族が入り込む余地はなかった。このバツァ族については文化人類学的観点や歴史学からの研究はわずかながらあったが、その言語についての研究はまったくなく、この神谷氏のものが最初である。そして、とりわけその詳細な音声学的記述と分析は、バンツール語研究ならびにアフリカ言語研究における大きな貢献であり、審査委員全員が博士(学術)の学位を与えるにふさわしいものであると一致して認めた。

なお、審査委員からの意見としては、以下のようなものがあつた。一部、音声学的用語に不備がある。母音にデプレッサー化があるならば、母音にもう1種類あることになるのではないか。音調を担う単位(TBU: tone bearing unit)を音節としているが、一部モーラとなっている場合がある。母音連続に関して、通常は2母音が連続した場合、融合を起こすのに対して、英語やアフリカンス語からの借用語のみとはいえ声門閉鎖音[ʔ]によって融合が妨げられる場合があるということは声門閉鎖音に音素の地位を与えるべきではないか。動詞語根に関して、-f-「死ぬ」、-lw-「喧嘩する」などの子音1個のもの(lwは唇音化されたlと解釈)を認めているが、これはバツァの実情に合わない。「死ぬ」は不定形ではukufa「死ぬ」であるが、これを形態素に分けると、語根が-fだとするとu-ku-f-aである。しかし音声的にfaとなるのは、バツァ語ではf-aに加えてfi-a, fe-a, fa-a, fo-a, fu-aの可能性はあるが、その中ならf-aを選択した根拠が示されていない。また「死ぬ」は高声調を持つが、もしこの語根に母音がなければ-f'-とせざるを得ない。これは子音が声調を持つとするか、あるいはこの語根にはいわゆるfloating toneがあるということになるが、こういったことはバツァ語では他に生じない。「喧嘩する」についても、語根を-lu-とせず-lw-とするのは、唇音化された音素がこれのみ存在するということになり、極めて異常なことである。様々な両唇音が口蓋化を起こすのは興味深い現象であるが、その音声的条件の考察が行われていない。動詞活用形における声調の分析にアドホックなものがある。動詞の関係節化で、目的語の場合が落ちている、などである。

ただし、これらの批判は神谷氏自身も意識している部分であり、これからの研究に生かしていく決意が表明された。